

# 富士に祈る 58

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

## 信仰と伝承 — 岡野聖憲・その12 —

先回は、醍醐寺で得度した聖憲が三宝寺池の供養に代表される「靈験」を示しながら、様々な試練を乗り越えていくまでを記した。今回は、東京市内の各地に集会所を広げていく中で、解脱会の教えを「祝詞」にまとめ懸案だった天津教への参加によって解脱会そのものを組織化し、いよいよ「六番地」の時代が始まるまでを記す。

昭和六年（一九三一）から昭和七年（一九三二）の初頭にかけて、靈修業と天茶供養によって、教えを説き、人々の精神作興を行う聖憲の活動は集会所の増加という形で東京市内に広がっていった。靈修業も、「修業者修行を行うもの」と、「仲

介者（指導を行う者）」として「訓解（修業者に知らせている靈に教え諭す言葉）をかけること」といったように、集会所ごとに活動を続けられるような形式が定まってきた。また、この年の五月八日に行われた北本宿での大祭では、これまで「一本松の小祠」と呼ばれていた祠を「天手力男尊宮舎」と呼び、「宝篋印塔」と並ぶ重要な信仰対象とするようになった。後に、この場所に「天神地祇一神宮」が祀られることになる。

春の大祭も無事に終わり、いよいよ天津教への系列化実現が検討された。聖憲は、茨城県磯原の天津教大司庁に竹内巨磨を訪ね、富山県婦負郡神明

村の竹内家代々の墓所から発掘した「古記録（主なものは、神代文字（象形文字）で書かれた「神代皇統譜）」や「古器物（宝剣、宝鏡、勾玉など）」を中心を整えられた教えの様々を修得した。そして、解脱会の各集会所を天津教の分教会という形にし、聖憲自らも「布教師」の資格をとって、「天津教解脱教会本院」を名乗ることになった。

ところで、聖憲は天津教の活動的中心であった高島康明と交流する中で「祝詞」と「御祭神」のことについて示唆を受けた。高

島がこのころ「天津祝詞太祝詞之解義」（昭和八年（一九三五）刊行）

を著していたころだったことも幸いした。聖憲は「解脱会の最初の勤行法



解脱会最初の道場・六番地御祭神(解脱会提供)

則としての祝詞」として「天津祝詞之太祝詞」（昭和七年十月十五日発行）や「奉先祖代々之靈魂舎拜」（昭和七年、月日未詳）といった祝詞を一枚物の刷り物として発行した。前者は神に対して奏上されるものであり、後者は先祖に対して奏上されるものである。このことから、これらは、後に聖憲が説く「敬神崇祖（神を敬い、祖先を尊ぶ精神）」という言葉に対応している祝詞であったといえる。

一方、集会所の会員から自発的に起こった北本宿の「手力男尊」の祠を建て替えるという話は聖憲の教えが徹底された以上に、会員自らも熱心に活動し、解脱の教えを体得していることを物語る。聖憲の喜びはひとしおであった。そこで、聖賢はこの祠の建て替えと祝詞の完成をもって、第一回の秋の大祭「手力男尊祭典」を企画し、ついに「天手力男尊宮舎」に御祭神

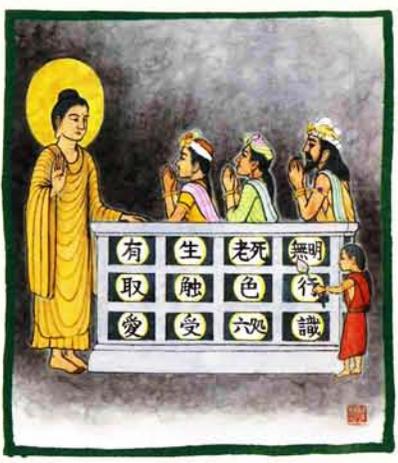
が祀り込められたのである。

ちなみに、第二回の秋季大祭は昭和九年（一九三四）に行われ、これは「天地神靈魂魄出頭」を祝う形になっているから、第一回目と二回目では祭典の主旨が異なっている。しかし、これは秋の大祭を定着させていく一つのステップであったと考えられよう。なお、この時期に行われた都新聞の「関東十霊場」の投票で北本宿の「宝篋印塔」は初め三位と得票を伸ばし、最終的には十四位と健闘している。これは、解脱会の組織力を示すエピソードでもある。

昭和八年（一九三三）の正月四日、先年の秋季大祭以降、種々の啓示を受けてきた聖憲は「天手力男尊宮舎」に祀るのは「天神地祇」と確信し、それを幟として建てることを計画した。そして、この年の春季大祭には「天津祝詞之太神鎮座祝詞」を発行したのである。

社の命名から鎮座の祝詞発行までの一連の動きは聖賢が「天神地祇」を信仰の対象とすることを明確化したできごとと考えられる。聖憲は後に刊行する「真行」のなかで「天神地祇」について、「万神万靈は悉く天神地祇に帰一している」と述べている。つまり、この世の信仰対象はすべて「天神地祇」に包括されるといえる。

一方、日々の勤行を会員にわかりやすくさせるため、口語に近い文体で「毎朝夕礼拝の詞」を作成した。会長一人の手による救済から会員各自が御祭神を祀り、修業をしていくスタイルが整えられたのである。さらに、信仰の拠点となる場所として、今までの「千秋」にほど近い荒木町六番地の家屋を買い取り、ここを本拠地とした。いよいよ「六番地時代」が幕を開けたのであった。



絵・橋本豊治

### む 無明よりはじむ十二支縁起

激しい欲求（渴愛）が原因となる執着を生じ、執着することが原因で思い通りにならないこと（苦）が生じるという縁起（因果関係）である。

十二支縁起とは、無明（無明）自分の生存欲のままに生きることより、老死に至る因果関係、つまり苦が起る過程を十二の段階に分けたものである。

すなわち、無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死である。